

の4国（順不同）が表の1位から4位までを占めることは、疑問の余地がない。次に、4位までと5位（どの国が来るだろうか？）以降との間には、かなりの点差が介在するのではないか。さらに、東アジア・東南アジア諸国中ではもっとも点数の低い国（インドネシアか？）も、全体の中での席次をみると、ほぼ中位に来るのではないだろうか。つまり、東アジア・東南アジア地域には、平均以上の低開発国ばかりが集中していることになる。

もちろん以上は、きわめてあらっほい臆測にすぎない。だが、もしそこにいささかの意味があるとすると、それは、たとえば10年後における南北問題のありようと、それに対する日本のかかわり方とについて、いくつかのことを示唆するように思われる。たとえば、おそらくは“外交的”な配慮に影響されて、「南」の近代化・産業化はさほど困難ではな

いと想定する（かに振る舞う）のが、現代の正教となっている。さらに、おそらくは同様な配慮から、「南」の近代化・産業化の進行スピードに、国間・地域間で大きな差がつくだろうというような議論は、ややしにくいような雰囲気がある。そういう正教が示唆することと、上の臆測が示唆することとの間には、顕著な差があるだろう。

ただ、上の臆測の大きな欠陥は、それがあまりにマクロ的（？）に過ぎるところにある。とくに、低開発諸国において最大のウェートを占める産業である農業について、私がまったくの素人にすぎないことは、臆測の妥当性を強く疑わせるだろう。私流の臆測またはパラダイムに対して、いったい熱帯農業の専門家の方々がどのように反応されるか、ぜひとも率直にお聞かせいただきたい。

第1セッション討論

司会 安場保吉*

討論司会者が論点をまとめ、以下の順序で討論が進められることになった。

- (1) 近代経済の成長との関連において東南アジアの現実をどうとらえるか
- (2) 経済発展の初期段階における農業の役割
- (3) 農業（農村）発展と工業（都市）との関係
- (4) 貿易と経済発展戦略について

〔1〕近代経済の成長という視点からのみでは東南アジア世界をうまくとらえることがむずかしいのではないか、あるいは先進工業国は、いわばいかにも unusual な変化をとげた国々にあって、他の国々ににとって近代

化、工業化、経済発展というのがそれぞれの社会が追求する問題意識として適当なのかどうかとの司会者からの問題提起にこたえて、3人からコメントがあった。

近代化すなわち西欧文明化と近代化への道が1本であると規定すると、たとえばインド文明のように西欧の技術文明を受け入れにくい体質をもった偉大な文明が脱落してしまうという不都合が生じる。近代化への道は1本ではなくて数本あるという認識が必要である（佐々木）。従来の地域開発計画などにおいて、土木屋と経済計算屋による方法論のすでに確立された定量的な分析や計画論でこと足れりとする風潮があるが、これに加えて社会組織や価値観のように定量化しにくく、計画にとり入れる方法論もできあがっていないような

* 京都大学東南アジア研究センター

側面をも追求し、現在の計画における跛行性を是正することが大事である。技術、経済、社会組織、価値観は文化の四つのアスペクトであり、これらをトータルに考えるのがプランニングというものである。価値観について付言すると、地域の開発計画にあたって必ずや住民の心の琴線にピンと触れる何かを見出すことができそうで（たとえばカンボジア人にとっては来世のはなし）、それをたぐっていった真の地域発展のための計画にアプローチしてゆくことができそうだ（川喜多）。経済発展のポテンシャルを判断するのに三つの側面を考慮する。一つは働くために食べるプロテスタンティズムの世界と、食べるために働くラテン世界の差にみられるような価値観や行動様式の差、二つに個人の自由な競争が保証される開放的な社会組織とそれが保証されない閉鎖的な社会組織の差、三つに識字率に代表される教育普及の差である。日本はこの三つの側面とも近代経済発展に適した体質をもつ国であるが、東南アジアの国々にはどうであろうか（有松）。

以上に対する報告者の議論を要約する。近代技術の側面に関しては基本的に国の差、民族の差はないはずで、発展の道は一本道であるが、技術をつかい、運用する社会の制度の側面からは数本の道がありうる。経済発展や地域の開発計画を語るとき、美しい言葉で語りうる文化的な、ある場合には人道的な側面と、一方で経済計算を必要とするきびしくも索漠たる他の側面も厳存する。先進国の技術文明が後進国へ滔々と流れこんでいるこの現実の中で、伝統的な価値観と現世利益的なあるいは物質的な向上の望みをどうつなぎ、整理してゆくかの課題にわれわれはこたえる必要がある（報告者）。

〔2〕と〔3〕 農業と工業を対置して、経済発展の初期段階における農業の役割を論ず

るという視点以外に、農業を別の視点からとらえることもできる。農村が生活に密着した農業を営むとともに、生活に密着した農村工業をも宿して両立させている場合があることを無視できないし、また農業はある意味で、国土、土地の維持管理を担う一種の環境管理産業であるという見方もできる。農村と農業のもつこのような機能を近代経済発展の理論の枠組の中にとり入れて新しい展望をひらくことはできないであろうか（北村）。都市近代工業と伝統的農業の二重構造モデル（2本モデル）のほかに、都市在来工業あるいは農村工業を含めた3本モデルを考える必要がある（小林一三）が、まず当面、農業、工業、貿易をめぐる比較的単純な理論の枠組をつくり、アジアの現状を分析し整理することが先決であろう（報告者）。

〔4〕 経済発展戦略をめぐるには、外貨獲得をねらう資本集約的産業化か、余剰労働力を吸収することを考えた労働集約的産業化を推進すべきかについて若干の意見交換があり（長谷山、報告者）、商業資本家としての華僑の工業化における貢献度合いについての異なる見解が述べられた（小林一三、報告者）。

以上のほか、アジアの多くの国々にがかつて植民地化され、長年にわたり経済的収奪を被ってきたことの現在の農業におよぼす影響（プランテーションの著しい発達と在来農民農業の停滞）という視点が報告には欠けているという指摘もあった（松島、家永）。国々によって異なる歴史、慣習、制度などの背景により工業発展における農村と農業の役割のパターンが全く異なる（たとえばインドの綿業発展におよぼすカーブ制などの影響）から、そのそれぞれのケースを個別に深く追求すべきことなども指摘された（家永）。

（文責 海田能宏**）

** 京都大学東南アジア研究センター